「関ケ原の戦いから来年で４２０年。誘客増へ、変革の『戦い』続く」

岐阜県の観光と言えば、古い町並みや絢爛豪華な祭り屋台で知られる飛騨高山か、粋人や文化人から愛された1300年の歴史を持つ長良川の鵜飼漁だろうか―。見逃せないのは「関ケ原」。日本人なら誰もが教科書で目にした1600年の関ケ原の戦い。舞台の不破郡関ケ原町では420年目となる来年に向け、歴史観光を推進していくためのトランスフォーメーション(変革)が進んでいる。

県が観光の基幹産業化を掲げ、町と再整備計画「関ケ原古戦場グランドデザイン」を策定したのは2015年。同年秋にはJR関ケ原駅前に観光交流館が開設した。来年7月には観光拠点施設「岐阜関ケ原古戦場記念館」がオープンする。縦約5m、横約8mの床面スクリーンで合戦の全貌を映し出すほか、古戦場を見渡す360°　ガラス張りの展望室でもてなす。

ソフト面も磨いてきた。徳川家康、石田三成ら主要な7人を「関ケ原七武将」と位置づけ、歴史好きが「推し武将」の足跡をたどれるウオーキングコースも設定。各武将をフィーチャーするイベントも展開してきた。今月には敵中突破の逸話が残る島津義弘ら薩摩の島津軍にスポットを当てて開催、盛況だった。

インバウンド（訪日外国人客）の取り込みも図る。ナポレオン最後の決戦地となったベルギーのワーテルロー、アメリカ南北戦争の激戦地ゲティスバーグの両古戦場とは「世界三大古戦場」として協調。貴重な史料を展示し合うなど連携を深めている。

県によると関ケ原古戦場の入り込み客数は14年に約14万人だったが、18年は約23万人。本年度はさらに上回る勢いという。時代こそ違えど、来年は岐阜県出身とされる明智光秀を主人公としたNHK大河ドラマ「麒麟がくる」が放送される。16年には「真田丸」効果で関ケ原もにぎわった。東京五輪・パラリンピックが開催され、日本中が盛り上がる20年。節目の年に歴史ファンたちの軍配は関ケ原に上がるのか―。関ケ原の変革の「戦い」は続く。

岐阜新聞社　西濃支社　編集部長　古家　政徳

秋の武将イベントで「関ケ原」のさらなる盛り上がりを期して勝ちどきを上げる関係者＝10月19日、不破郡関ケ原町関ケ原、笹尾山グラウンド